

「ケロリン」をナショナルブランドにした故笹山忠松氏

富山県の先賢者で顕彰され郷土先賢室に展示される

(一社)日本置き薬協会

金融王安田善次郎、事業王浅野総一郎、薬学者高峰譲吉、讀賣中興の祖正力松太郎等、富山県が輩出した偉人を顕彰する「郷土先賢室」(同県教育記念館内)に、(株)内外薬品商会(現富山めぐみ製薬株)元副社長の故笹山忠松氏が昨年11月に加わった。顕彰者150名中、薬業関係者で三人目の偉業である。

富山の配置薬を誰もが知る医薬品に押し上げたアイディAMAN 笹山忠松(1926~1981)



笹山忠松(ささやま・ただまつ/旧姓中野)は、大正15年(1926)金沢市の伝馬町(現在の片町近く)の小林寺に父中野松巖、母きくいの次男として生まれた。その小林寺へお参りする人々の中に富山市の笹山ハルと孫の慶子がいた。

笹山慶子は昭和7年(1932)内外薬品商会の笹山順蔵とミドロの長女として生まれた。母ミドリが妹たちの世話で多忙なため、慶子は祖母のハルに育てられた。幾度となく通い会っているうちに、忠松と慶子は気心の知れた間柄になっていった。忠松は駒沢大学卒業後、金沢市役所に勤務していたが、慶子の思いを受け入れて、昭和26年(1951)慶子と結婚。富山市の内外薬品商会(現富山めぐみ製薬株)を背負うことになった。

当時、全国に薬局が増え、配置薬が先細りしていくことが予想された。そこで忠松は内外薬品の主力配置薬であったケロリンを薬局に置いてもらえる一般薬にすることを重役会議に提案したが、旧来の商法を重視する重役たちには受け入れられなかった。しかし忠松は諦めることなく、数人の若い営業マンを引き連れ、自ら先頭に立ち、ケロリンの全国キャンペーンに乗り出した。

しかし、当時、欧米からの効き目の早い薬が重宝されていた時代に、「おきぐすり(配置薬)」の薬をおいてくれる薬局はなかった。そこで忠松は消費者にケロリンを知ってもらい、名指しで買ってもらえるようにすることを目指し、昭和30年(1955)、ラジオを使ったコマーシャル放送を開始した。昭和33年(1958)にはサトウハチローがCMとして初めて作詞し、服部良一作曲、楠トシエが歌うケロリンのコマーシャルソング「青空晴れた空」が全国のラジオから響き渡った。このCMソングの効果は絶大でケロリンは販売数を大きく伸ばした。一方、そのような忠松のやり方に、社内からは「広告費を使い過ぎる」、配置業界からは「消費者の配置薬離れを促進するものだ」と批判されることもあった。

その後、昭和38年(1963)忠松のもとへコマーシャル湯桶のスポンサー企業を求めて、睦和商事社長山浦和明(当時営業担当)が訪れた。話はすんなり決まり、山浦がデザイン開発したプラスチック桶にケロリンの広告文字を入れ、東京駅前の「東京温泉」に試験導入した。ちなみに初期の湯桶は黄色でなく白色であった。その後二人は、昼間はケロリンの販売で薬局や問屋を廻り、夜は温泉宿や銭湯で風呂桶を売り込み、昼夜を問わず営業で日本全国を駆け巡った。忠松のアイディアはとどまることを知らず、富山から空輸したますのすしを新商品と一緒に参加者に提供する新製品発表会の開催に加えて、後楽園球場のすべてのごみ箱への広告の貼り付けや東京タワーの入場券への広告印刷、銀座服部時計店の電光ニュースへの文字広告と、いわゆる「隙間広告」の先駆けともなった。そしてさらに、新製品の開発・通信販売・海外生産・多角的経営等、新しいものを取入れ、時代の先端を進む経営者として活躍したが、昭和56年(1981)3月死去した。56歳の若さであった。